35周年企画　部会活動

会誌編集部　この10年

増田　徹

会誌編集部のこの10年は、誌名を「病院図書室」から「病院図書館」へと変更した当時の森川治美編集部長のリーダーシップの下、盤石の態勢で始まりました。近畿病院図書室協議会（以下病図協）にかかわりはじめて2年目であった私も会誌編集部に入ることになりました。その頃の編集会議に参加し、編集部員である先輩方がもっておられた確固としたライブラリアンシップとエディターシップに驚嘆したものでした。それまでも、編集部長は病図協草創期からの中心メンバーが歴代長期にわたって務められていましたが、病図協という組織の意識の高さを、そのときの会誌編集部はとりわけ維持し、具現していたと言ってよいかと思います。しかし当時の編集部長がご勤務先で図書館から異動することになり、諸処の事情で私が編集部長を務めることになりました。これは明らかに私の手に余ることでした。こういった人をめぐる動きは今も変わらず、図書館界を象徴するものと言えるかもしれません。会誌編集部もこのとき転換期を迎えました。

それからの会誌編集部の特徴は、何と言っても同じメンバーで7年続いたことで、病図協の部活動として他に類を見ないことであったと思います。編集方針と言ってよいほどのものかどうかわかりませんが、そのような結びつきを土台に、私たちは何より自分たちが楽しもうと考えました。忌憚なく意見を出し合い、自分たちが本当に面白いと思うトピックを取り上げ、いろいろな方に果敢に原稿をお願いし、ときには取材に出向いて、人にお会いすることもしました。特集の「患者図書館」や「魅力ある図書館」、連載の「図書館の小物たち」「図書館員のツボ」はその代表例と言えると思います。また、できるだけ会員のみなさまに誌面に参加していただこうといたしました。各特集ではできるかぎり事例報告をお願いし、特集「心に残る一冊」などは、みなさまのご協力により本当にいい企画になったと思います。振り返って見ると、これまで積み重ねてきた特集も連載もそれなりの数になりました。私たち編集部員の思いが誌面から読者のみなさまに伝わっていたら幸いです。またこれからもよりよい会誌をみなさまにお届けできるよう努力していきたいと思います。

ますだ　てつ：藍野大学 中央図書館